

赤土山のからすばあさん

秋です。見渡す限りすすきの原っぱ。

子どもたちがかくれんぼするのにもってこいの場所。

このススキは、冬になっても立ったまま枯れてしまうだけで、春にはその根元から緑の葉が伸びてくる。だから、いつだってその中に入れば大人だってすっぽり隠れてしまう。ここは、赤土山。山といってもほんの小高い丘なんだけどね。

赤土山からたんぼを挟んで向こうに保育園がある。その子供たちは天気がよければ、いや、雨の日も時々、傘をさしてここに遊びに来た。

あ、ほらほら、今日もにぎやかな声が聞こえてくる。

僕こうすけ、僕たちは赤土山が大好き。かくれんぼ、探検ごっこ、秘密基地もある赤土山は、僕たちのお気に入りの場所だ。だけど、ひとつだけ怖いことがある。

それは、からすばあさんなんだ。

俺たちがいくとすぐにやってきて、空を回ってしわがれ声で鳴く。

カーカーって鳴かず、カッカッカーって鳴くからすぐにわかるんだ。しわがれ声だから、誰かがからすばあさんって名前を付けた。

僕たちはからすばあさんごっこをして、「からすばあさんに さらわれちまうど。」って友達を脅かしてみたり、草に足が絡むと、「ひゃあ、からすばあさんの畏だ。逃げろー」ってきゃあきゃあ逃げ回ったりしてた。

今日も午前中赤土山で遊んだ。ああ、今日も面白かった。

保育園にはおひるねがある。毎週金曜日になると保母さんたちはこの時間に会議をする。だからみんな寝たふりをして保母さんが行ってしまおうと布団の中でおしゃべりをしてるんだ。

こうすけ 「おい、ただし赤土山行くべ。」

ただし 「えー、見つかっちゃうべな」

こうすけ 「静かに行けば大丈夫だべな。」

ゆみこ 「あ、私も行く」

あっくん 「えー、あっくんも」

僕とただしとゆみこと3月生まれが一番小さいあっくん。まだ起きてた4人でこっそり部屋を抜け出し、赤土山へ行った。

ただし 「おーい、こうすけ、またからすばあさん来たど。おれたちだけじゃあ、ちっこええなあ。」

こうすけ 「俺たちはつええんだ。からすばあさんなんか気にすんな。」

ただし 「う、うん」

こうすけ 「じゃあ、かくれんぼすんべ。僕が鬼」「もういいかーい」

「あ、ただしめっけ」「あ、ゆみこ、めっけ」「あれ？あっくんは一緒じゃねえの？」

ゆみこ 「うん、一人で隠れたの。」

こうすけ 「へえ、どこ行ったんだ？」「おーいあっくん。もう出て来いよ。」

ゆみこ 「どこにいるの？」

ただし 「からすばあさんにつれていかれっと。」

こうすけ 「あれ？そういえばからすばあさんいねえなあ。」

ただし 「ああ、早くあつくん探しに行くべ。」

僕たちは怖いのを我慢して、ススキの奥へ入っていった。するとそこに少し開けた場所があって、一本の木にハンモックが揺れていた。

こうすけ 「あー、あつ君が寝てる。」

ゆみこ 「え？赤いエプロンをかけたからすがハンモックを揺らしてる」

ただし 「か、からすばあさんだ。」

こうすけ 「やっべ、おい、あつくん、起きろー」

からすばあさん 「カッカッカー、起こしちゃだめだ。気持ちよさそうに寝てるじゃないか。」

こうすけ 「おめ、あつ君をどうすんだ。」

からすばあさん 「草の上で眠りそうだったから、ベッドを貸してあげたんだ。」

「友達だからね。お前たちよくあたしの悪口言ってるけど、あたしは子どもをさらったりしないよ。子供と遊ぶのが好きなんだよ。いいからすさ。」

ゆみこ 「へえ、そうだったの。だけど自分でいいからすなんておかしい。」

ただし 「そうだよな。」

見るとあつ君は腰におむつみたいな赤い布を巻き付けている。

こうすけ 「あ？なんだこのあかいの」

からすばあさん 「おもらししたからね。布を当てておいたんだよ。はっはっはあたしや子守は得意なんだよ」

あつ君が目を覚ました。

あつくん 「あーあ、おはようからすばあさん。あれ？みんなもいるんだ。あ、えへへ、見つかった。」

こうすけ 「あ、おひるねの時間が終わっちゃうぞ、俺たち早くかえんねんと。」

ただし 「いけね。あつくんいくべ。」

ゆみこ 「ばいばい、からすばあさん。」

あつくん 「からすばあさん、ありがとう。」

からすばあさん 「ああ、またおいで。カッカッカー」

僕たちは急いで保育園に帰って布団に入った。ぎりぎりセーフ。保育さんが戻って来た。

保育士 「あれ、あつくん、なあにこの赤い布」

あつくん 「え、なんだろう、あつくんしんねえ。」

由美子がフフッと笑った。僕も正もへへと笑った。そのあとみんな赤土山へ行った。保育さんがふざけて脅かした。

保育士 「ほら、からすばあさんにさらわれちゃうぞ。」

こうすけ 「そんなことしねえよ。からすばあさんは、子どもが好きないいからすなんだど。」

保育士 「へ？そうなの？」

こうすけ 「そうだよな。」

ただし 「だよな。」

ゆみこ 「そうだよね。」

あつくん 「ね。」

保育士 「そう、みんな何で知ってるの？」

4人 「ひーみつつ」

空の上でからすばあさんが鳴いた。

からすばあさん 「カッカッカー。カー、カー、」

からすばあさんの声はなんだかうれしそうだった。